

エミリー・ロサーレス著 木村裕美訳「まぼろしの王都」河出書房新社 2009年8月30日刊を読む

まぼろしの王都

1. 歴史の謎

「そこが歴史の謎なんだよ。いま残っているものは、そうだな、ものすごくでかいモザイク画がもともとあって、そのなかで、モザイクのテッセクの薄片がほんの何枚か見えてるような感じかな。しかも、あちこちに散らばっているから、モザイクの全体像はおれたちが推測しなきゃいけない。どうにでも好きに想像できるってわけだ！」

P18

2. ナポリ

ナポリでは、曙光とともに、水平線を描くラインがすこしずつ、ゆるぎない量感をもって海から浮かびあがる。南のほうにはカプリ島の隆起とソレントの海岸、東には、見るものを魅了しいかく威嚇するヴェスヴィオ山の蒼いシルエット、西は、カステル・デコーボ卵城のむこうにポジッリポの断崖、さらに彼方には、湾をとじるようにイスキア島がある。平和の時代——ちょうどカルロス王がナポリを後にされるまえがそうだったが——湾じゅうに帆船が散らばり、港は沸騰するにぎわいで、陸から、海から入ってくるありとあらゆるニュースを、都市は今か今かと待ちかまえていた。地中海広しといえども、ナポリにまさ勝る場所はほかにない。

P35

3. マドリッド・王宮

(1)傑作はなんといっても<王座の間>の『スペインの栄光』、詩人たちに高揚され、美德に支えられ、治下のさまざまな領国にとりかこまれる君主国家スペインを描いたものだ。フレスコ画は、鑑賞者の目をひきつける焦点をいくつか作りだすことで、途方もない広がりをもつこの部屋の困難な条件を克服している。上部天井面にしても、コーニス軒蛇腹に沿った空間にしてもそうで、描かれた天空がこうした構図上のすべての焦点をむすび、緊張感を生み出すのである。その天空で、湧くように盛りあがる巨大な雲のすきまに強烈な光が放たれ、そこから虹が弧を描いて立つ。画中の人物たちを照らし、磁石のようにひきよせる空、人物はみな無重力に見えて実体があり、宙にういているようでも、重量感のあるエネルギーをもっている。この人物たちにふりそそぐ光明が効いて、彼らの衣という衣に陶醉をさそう色彩の濃淡がうかび、その衣の透明感が、絶妙な筆づかいで表現されているのだ。

(2)<王座の間>の構図は、君主国を称揚し、王の美德と、スペインおよびインディアスにおいて王が所有する富を讃えるものと、いずれは解釈されることになる。でも、しばし静寂に身を置いて、この絵をながめるだけでいい。すると、勝利と崇敬の歌、精神の高まりと五感の悦びの歌が、心のうちに湧きあがり、こうした魂の震えは、君主やその美德にではなく、この絵が見せてくれる人間と情景に、画家の巧みな筆にむかうのが感じられる。形態と色彩、光と遠近法をあやつる

画家の筆、チュニクの透きとおるような金色、マントの空色、幟旗の乳白色、雲の真珠色の輝き、前脚を蹴りあげた馬の疾ギヤロツブ駆、こぼれんばかりの豊かな乳房、高く掲げられた聖杯の喝采...
...我々の魂の震えはすべて、そういうものにむかっている。

(3)王の名も、広大な領土も誰ひとり思いださなくなる日が、おそらくいつか来る。それでも、ティエポロの絵画にみなぎる悦びと感動は、永久に残ることだろう。偉大なるティエポロの名は、永遠に響きつづけるのだ。

P121 ~ 122

4 . 人生

私たちは病に負けるかもしれないし、事故に遭うかもしれない。悪党どもの餌食になったり、災難や戦争にまきこまれることだってあるだろう。しかし、誰かが自分の死を悲しんでくれる、自分の不幸を思い、死を悼み、自分のことを思い出してくれる人がいるとわかれば、たとえ死んでも、私たちは生きつづける。そう、完全に死んでしまうわけではないのだ。自分が生きてきたということを知りながら死ぬ。誰かがそれを知っていると、つまらない蛆虫や、無数の葉にまぎれた一枚の朽ち葉のように人生をおくってきたわけではないと信じて。

P312

[コメント]

スペインの知識人の中の知識人による歴史推理小説。ゆるぎのない教養に裏うちされた作品。ヨーロッパ文明の深さを感じさせる読みごたえのある作品。

- 2009年8月27日林明夫記 -